

テクネ・マクラ「芸術は永し」

TEXNH MAKPA

女子美術大学歴史資料室ニュースレター

第 5 号



佐藤志津（前列左から11人目）と学生・教員たち 菊坂校舎にて
明治42～大正7年（1909～1918）頃

学長挨拶

佐藤志津と私立女子美術学校再興展に寄せて

横山 勝樹



新入生の皆さん、入学おめでとうございます。在学生の皆さんも新学期を迎え、新たな目標で夢いっぱいだと思います。また日頃ご支援いただいています皆様にはご厚情を厚く御礼申し上げます。

女子美術大学は、明治33年(1900)創立の私立女子美術学校から数えて本年で113年目を迎えます。また昨年5月には、多くの皆さまのご支援のもと、創立110周年記念事業として、杉並キャンパス1号館に歴史資料展示室を開設しました。本学の歴史について学生、卒業生、一般の皆さまに広くご覧いただきたいと思っています。

女子美術大学の建学の精神である「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位の向上」「専門の技術家・美術教師の養成」は、今日においても本学の重要な社会的使命です。歴史資料展示室は、先人たちが描いた夢を知り、高等教育における美術とデザインの制作研究が、どのようにして切り開かれてきたのかを学ぶ場としての役割をもっています。ここで女子美術大学の精神の源と、その発展の過程で先

人から受け継がれた風を感じてください。

このような自校史学習の目的は、単なる愛校心を強要することではありません。本学のアイデンティティを知ることで、学生の皆さんには、共に学ぶ仲間との連帯感や帰属意識を創り出していただきたいと思います。それによって皆さん自身の個性も磨かれ、これからの学生生活はもとより、卒業後に新しい道を切り開こうとするときや、困難に遭遇したときに発揮される大いなる力となるでしょう。

現在、歴史資料展示室では本学初代校主・二代目校長の佐藤志津先生の生涯と功績について紹介し顕彰をする「佐藤志津と私立女子美術学校再興展」を開催しています。展示では本学開校当時の背景、関わった人物、環境などを一世紀以上前の資料や授業風景の写真をもとに探っています。開校間もない本学が困難に陥った時、佐藤先生は何を考え、どのような行動をしたのでしょうか。皆さんもぜひこの企画展をご覧ください。

佐藤志津と私立女子美術学校再興展

2013年
1月16日(水)~7月15日(月・祝)

女子美術大学歴史資料展示室

東京都杉並区和泉1-49-8 女子美術大学杉並キャンパス1号館1階

開室時間 10:00~17:00 (入室は16:40まで)
休室日 火・日・祝日 ※ただし、7月14日、15日は特別開室

女子高等美術教育の
萌芽を守り育んだ偉人

問合せ先 女子美術大学歴史資料室 〒166-8538 東京都杉並区和泉1-49-8
TEL 03-5346-4658 E-mail heritage@venus.joshibi.ac.jp

女子美術大学

ニュース

企画展「佐藤志津と私立女子美術学校再興」開催

山田 直子

女子美術大学歴史資料展示室では、2013年1月16日より企画展「佐藤志津と私立女子美術学校再興」展を開催しています。

佐藤志津（1851-1919）は、医学博士で順天堂第三代堂主である男爵・佐藤進（1845-1921）を妻として支えた人物であり、一方で、私立女子美術学校（現女子美術大学）の初代校主、第二代校長を務めた人物です。

本学の前身である私立女子美術学校は明治33年（1900）、教育者・横井玉子や彫刻家・藤田文蔵らによって当時において唯一の女子のための美術学校として創立されました。しかし、まもなく経営難に陥ります。その際、本校の経営を引き継ぎ、校主・校長として廃校の危機から救ったのが佐藤志津です。本展では、歴史資料やパネルを通じて佐藤志津の生涯とその功績を紹介しています。

佐藤志津は、父・佐藤尚中が順天堂創始者佐藤泰然の養子となったため、順天堂を開学した名家・佐藤家に育ちます。後に順天堂第三代堂主となる佐藤進と結婚した志津は、鹿鳴館に招待され出席する一方で、そこで



佐藤志津と私立女子美術学校再興展会場

行われるバザーへの参加や福田会育児院恵愛部創立に尽力する他、日本赤十字社篤志看護婦として活動しました。また、女性医師の先駆者である高橋瑞子や吉岡彌生を援助しました。

私立女子美術学校の校主・校長就任以後は、広く高等女子美術教育の意義を訴え、教育・政財界の援助を得、教育・校舎などの施設の充実を図りました。

明治41年（1908）、大規模な火災により校舎の大半が焼失してしまいましたが、志津はこの災難をむしろ契機とし、より広い新校地を獲得。多岐に渡る人脈を生かし、出資金・寄付金を集め、本郷菊坂町に木造3階建て校舎を建設します。まさに禍転じて

福と成す。志津の前向きな生き方を示す出来事です。

また、志津は各種学校として設立した私立女子美術学校とは別に、大正4年（1915）、高等女学校令によって私立女子美術学校附属高等女学校を創立し、自ら校長に就任します。翌年には佐藤高等女学校に改称。これが現在の女子美術大学付属高等学校・中学校です。また、同年、志津は高等女子美術教育に貢献した功績により勲六等を叙され、宝冠章を授与されました。

本展を通じて本学の危機を救い、再興させた佐藤志津の生涯と功績に触れていただければ幸いです。

（歴史資料室学芸員）

取材レポート

芸術学部アート・デザイン表現学科

アートプロデュース表現領域のお墓参りに参加して

遠藤 九郎



谷中霊園 玉子先生お墓にて

本学の芸術学部アート・デザイン表現学科アートプロデュース表現領域では学科新設以来、1年生が自分の誕生月に研究室のスタッフと卒業生と共に女子美の母である横井 玉子先生と佐藤 志津先生のお墓参りを毎月行っています。これは学科主任、南畷 宏教授(元熊本現代美術館館長)の意向で行われています。そこで今回、歴史資料室で「佐藤志津と私立女子美術学校再興展」を2013年1月16日から開催していたこともあり、1月のお墓参りに同行させていただきました。当日の19日は、一週間前に降った大雪の影響で雪がかなり残っている状況でした。14時、学生と研究室スタッフ全員がJR日暮里駅に集合してお供えの花を求め、玉子先生の眠る谷中霊園に向かい、その後、志津先生が眠る駒込に移動、いずれのお墓でも丁寧に雪を掻き分けて掃除をし、仏花を手向け、校歌を捧げられました。南畷教授から、日本の

夜明けの時代、明治に活躍した玉子先生の横井家の話、吉祥寺では、志津先生亡き後、本学を引き継ぐ夫である進先生、(財団法人女子美術学校初代理事長・三代日本学校長)にも語られた。参加した皆さんと思いを共にしました。先の谷中墓地には佐藤家の人々も眠っており、志津先生の祖父、順天堂初代堂主 佐藤 泰然先生、志津先生・父佐藤 尚中(二代目堂主)先生も眠っており共にお参りをしました。また授業との関係では「アートはアーティストが“作品”を作るだけでは成立しない。それを見つめる「観客」がいて作品の素晴らしさが、姿を現し、見る人の世界を作る。人生も同じです。色々な苦難を乗り越え、また、喜びや、悲しみ、その涙を加味しながら、アーティストの「作品」と出会う。その作った人の心をいかに世界につないで伝える事が出来るかが大事だ」これはアートプロデュース表現領域の教育理念にも繋がるといふ。そのことは「自校史の実践と表現を学ぶ心構え、お墓の前で今の自分を見つめることで、未来に夢を発信する力が湧くのではないだろうか」との言葉も頂きました。最後にお墓参りに参加した学生から話を聞いてみた。一年生Aさんは「来てよかった。この一年



駒込吉祥寺 志津先生お墓にて

間は夢中だったけれども、110年前の創立時の話を聞いて、その情熱を知って勇気が湧いてきた」、また卒業生Bさんは「卒業後、色々な事があり、現在現代パステル協会で活動していますが、何かもやもやしたものがありません。今回参加したことで初心に戻り、心が洗われたような気がしました。機会があれば友人と共に参りたい」と感想を残しています。

取材で、この言葉から自校史を学ぶことの大切さとこれからのアート表現を学ぶ皆さんが見据える世界が通じ合うと感じました。それは、現在の私たちがお墓の前にて110年前の女子美の2人の母とそれを支えた人々が築き上げたその思いに向き合う時、南畷教授が問うように、きちんと応えられているのか自問自答し、自分を見つめ直すことが出来ると思う。それと同時に、未来を夢見てその目標に向けて発信する力が湧いてくるのではないだろうか。

(参与 歴史資料室担当)

取材レポート

女子栄養大学図書館開催企画展

「野口義恵画帖《ぢきろう》」

山田 直子

2012年3月10日より2013年3月31日まで女子栄養大学図書館ブラウジングルームにて同大学所蔵の野口義恵画帖《ぢきろう》の展示が行われました。季節に応じて展示替えを行いながら実施。訪問した8月29日には、「郷土菓子—日本ひとめぐり」をテーマとし、日本各地の名菓を描いた作品が展示されていました。

野口義恵さんは、明治37年（1904）鳥取県日野郡江尾村（現日野郡江府町）に生まれ、大正10年（1921）、女子美術学校（現女子美術大学）日本画科撰科に入学、大正13年（1924）卒業。さらに日本画科撰科高等科に進学、大正15年（1926）に同科

を修了しました。当時、日本画科教員は松島白虹や結城素明が務めていました。卒業後、画家・河村目呂二に師事。画壇には属せず、本の挿絵を描くなどの活動続けました。親交のあった柳田国男著『村と学童』（昭和20年）の挿絵もその一つです。

また、女子栄養大学出版部編集・発行『栄養と料理』第12巻（戦後復刊号 昭和21年）から2年間、その表紙や挿絵を描き、自身の随筆も寄稿しました。

同大学には、野口義恵画帖《ぢきろう》が約1,000点残されています。ぢきろうとは食べ物を盛る容器・食籠^{じきろう}のこと。画帖には、野口さんお気に入りの菓子や野菜、贈答品などの絵とともに

に感想やコメントが書かれています。出展作品の一つ、昭和29年（1954）5月9日の画帖には、鎌倉豊島屋の鳩サブレの絵とともにその日の出来事が記されています。それによると、当日は神奈川県立近代美術館友の会に出席。鍋木清方回顧展を鑑賞し、その後、建長寺にて鍋木氏を囲んで精進料理を味わったようです。画帖から楽しい思い出を書き残す野口さんの弾む心が伝わってきます。

野口さんは生涯独身で、各地を旅し、その風土をモチーフにした絵も多く残しました。また、能楽を好み、能画を描き、和服の絵付けもしていたといえます。『栄養と料理』の表紙・挿絵を手掛けたことから女子栄養大学卒業生と交流し、絵の指導をしたこともあるそうです。多種多様な趣味と多くの友人や生徒に囲まれて生活を楽しむ野口さんの生前の姿が感じられる展示でした。

【謝辞】本報告執筆にあたり女子栄養大学図書館 池内和恵様、矢野大介様に御協力を賜りました。心より御礼を申し上げます。

（歴史資料室学芸員）



野口義恵
『女子美術学校第三十回卒業生記念帖』
大正15年（1926）3月



野口義恵画帖《ぢきろう》明治29年（1954）5月9日

コラム

ヴィーナス像とヴィーナスたち

松村 奏子

明治33年（1900）、女子のための美術学校としてその歴史を刻みはじめた本学にとって、愛と美の女神であるヴィーナスはシンボルともいえる存在でした。現在、杉並キャンパスにはフランス・ルーブル美術館にある《ミロのヴィーナス像》の等身大複製石膏像が設置されています。平成12年（2000）には、創立100周年記念展覧会のタイトルを「ヴィーナスたちの100年」とし、学生をヴィーナスに喩えて、卒業生たちの作品を展示しました。本稿では、女子美の歴史に登場したヴィーナス像について紹介します。

現在、歴史資料室に残る資料で初めてヴィーナスが登場するのは、大正時代に撮られた一枚の写真です【写真1】。石膏像が並ぶ教室でイーゼルに画板を立てかけデッサンする学生たち。今も変わらぬ授業風景ですが、彼女たちは着物姿です。長めの袂を揺らしながら真っ黒な木炭を手にデッサンに励んでいるようです。彼女たちが描いているのは《ミロのヴィーナス像（複製）》。縮小版のようで、高さ1メートル前後でしょうか。

この写真は、大正6年（1917）



【写真1】 西洋画科授業風景 大正6年（1917）頃

頃の西洋画科の授業風景で、正面奥に立つ男性教員は、明治から昭和にかけて活躍した洋画家・岡田三郎助です。学生たちは、フランス留学を経験した岡田先生に《ミロのヴィーナス像》の由来を教えてもらいながらデッサンしていたことでしょう。

木炭画の授業は、西洋画科の科目であったため、他学科の学生がこの像の存在を知っていたかどうかは不明です。しかし、大正14年（1925）に創立25周年を迎えた時には、その記念品として、校章で用いられる八咫鏡の中に《ミロのヴィーナス像》の頭部を配した帯留が配られました【写真2】。この時、全学生が《ミロのヴィーナス像》の存在を知り、学校側もすでに女子美のシンボルとして意識していたことが伺えます。



【写真2】 帯留 女子美術学校創立25周年・佐藤高等女学校創立10周年記念品 大正14年（1925）

長い間、縮小版しか見ることの出来なかった学生たちが、実物大の《ミロのヴィーナス像（複製）》と対面したのは、第二次世界大戦後のことでした【写真3】。この像が置かれた経緯は不明ですが、専門学校から大学へ昇格した昭和24年（1949）頃に設置されたものと考えられます。

しかし、昭和31年（1956）4月11日深夜、入学式を翌日に控えていた杉並校舎（木造）で火災が発生しました。ヴィーナス像が置かれていた本館の地下食堂付近から出火し、校舎の大半が焼失するものでした。炎か

ら逃れることが出来なかったヴィーナス像は、鎮火後、頭部を失い、泥だらけで倒れている姿で発見されています【写真4】。数日後に発行された『女子美術大学新聞』第6号（女子美術大学学友会新聞部編集）には、「女子美を象徴するかのように玄関ホールに置かれていたヴィーナスが、くすぶる煙の中で無残にも破壊されていたのが、淋しさを加えていた」という記事が掲載されています。



【写真3】 焼失前の杉並校舎本館ホール
昭和30年（1955）頃



【写真4】 杉並校舎火災後のヴィーナス像
昭和31年（1956）

わずか数年で失われてしまったヴィーナス像でしたが、それから約10年後、今度は女子美を巣立っていった卒業生たちにより再び設置されることになります。その新しいヴィーナス像



【写真5】 2号館中庭 昭和40年（1965）頃

は、昭和40年（1965）の創立65周年にあわせて同窓会より寄贈されたもので、黒い台座とともに2号館中庭（現在のニケ広場）に置かれました【写真5】。その後、昭和42年（1967）に本学が《サモトラケのニケ像（複製）》を購入し、そこに設置したことにより、校庭に面した旧3号館（図書館）前に移されます【写真6】。それから約40年、その場所で学生たちを見守り続

けましたが、平成19年（2007）から始まったキャンパス整備における旧3号館解体にあたり、2号館入口を経て、現在は、1号館1階に仮設置されています。設置されてから長い年月が経ち、茶色く煤けてしまいましたが、今日も校舎の一角で若いヴィーナスたちを見守っています。

（歴史資料室学芸員）



【写真6】 旧3号館前 平成2年（1990）頃

寄贈報告 2012年7月～2013年3月

作品・資料をご寄贈いただいた方の御名前を記し、感謝の意を表します。

- 木内康英氏 『女子美術学校第29回卒業記念帖』(大正14年)等5件
- 松島順子氏 絵画科洋画専攻版画コース資料一式
- 鈴木暁子氏
女子美術学校創立25周年佐藤高等女学校
創立10年記念品 帯留
- 皆川明子氏 酒井絢筆刺繍下絵等5件
- 田中ふさ氏
刺繍科課題《日本刺繍基礎縫い》等10件
- 木下小夜子氏
一村久世筆西洋画科課題木炭デッサン等7件
- 東慶子氏 佐藤中学校校章
- 水野八千代氏
女子美術大学本館落成記念冊子等2件
- 李張鳳氏 刺繍屏風《ニケ》等2件
- 岡野貞二氏
『女子美術学校第27回卒業記念帖』(大正12年)
- 魚住和晃氏 何香凝関係資料2件
- 内田早苗氏 『内田家古人の書翰集』全2巻
- 小松富士子氏
『女子美術大学学生新聞』第18号等2件
- 谷口秀子氏 原胤昭関係資料
- 岩田嘉之氏 60周年記念スプーン

表紙写真

佐藤志津(前列左から11人目)と学生・教員たち
菊坂校舎にて

明治42～大正7年(1909～1918)頃

私立女子美術学校最初の校舎である弓町校舎は、明治41年(1908)10月13日火災により大半が焼失してしまう。当時、校主・校長を務めていた佐藤志津はこれを契機として新たに本郷菊坂町に土地を求め、新校舎建設を計画する。寄付金を集めるとともに自らの衣類などを売却してまで資金をつくり、明治42年(1909)7月に菊坂校舎竣工を実現させた。本写真は佐藤志津校長と学生・教員たちが菊坂校舎を前に撮影したもの。

歴史資料室日誌

2012年12月

女子美術大学同窓会主催企画展「刺繍をまなぶ」に協力(女子美アートミュージアム、11月3日～11月25日)。歴史資料室所蔵資料貸出。

2013年1月

企画展「佐藤志津と私立女子美術学校再興」開催(女子美術大学歴史資料展示室、1月16日～7月15日)。



李張鳳《ニケ》刺繍屏風(絹布、絹糸) 四曲一隻 186×180cm
(韓国出身。昭和14年(1939)女子美術専門学校師範科刺繍部卒業)
本作品は李張鳳氏が本学同窓会主催企画展「刺繍をまなぶ」のために制作したもので、同窓会の協力で本学歴史資料室に寄贈されました。
撮影：坂本敦宏

TEXNH MAKPA 第5号

テクネ・マクラ 「芸術は永し」

女子美術大学歴史資料室ニューズレター

発行日：2013年4月1日

編集・発行：女子美術大学歴史資料室

デザイン担当：竹田奈那子

制作・印刷：株式会社 日相印刷

〒166-8538 東京都杉並区和田1-49-8 女子美術大学1号館1階

TEL：03-5340-4658 FAX：03-5340-4683

E-mail：heritage@venus.joshibi.jp

 女子美術大学